

ジャグパル

JugPal



2008年10月25日 第42号



インタビュー

【 Chang (兵藤禎晃) さん 】

今回は名古屋を拠点に活動しているクラウン集団「プレジャーB」のメンバーである Chang(チャン) こと、兵藤禎晃(ひょうどう さだあき)さんにお会いしました。

8月9日に東京都児童会館で初めてプレジャーBの作品「コメディークラウンサーカス」を観て、そのバラエティ豊かな楽しさ溢れる公演に心が和みました。この作品に出演しているのは、リーダーであるK(ケイ)をはじめとしてTama(タマ)、LONTO(ロント)、Canon(カノン)そしてChang(チャン)といったそれぞれ個性豊かなクラウンたちで、特にサーカス好きの私は、ジャグリング、ローラボーラ、そしてアクロバットを元気いっぱい遊ぶように楽しく演じていた Chang に目をひかれました。

…という訳で名古屋まで行ってきましたぁ～。＼(^o^)/

夜、待ち合わせのJR名古屋駅改札口で、上背176cm細身のイケメンの兵藤さんは、金髪にピアスをキラリと輝かせながら、初対面の私に溢れんばかりの“笑顔”で駆け寄って出迎えてくれました。あたかも遠距離恋愛中の恋人に久しぶりに会うが如く。(^^)

その後の食事中も兵藤さんは始終“笑顔”を絶やすことなく、たくさんたくさんお喋りしてくれました。この上面だけではない、まるで彼の心そのものを代弁しているかのような“笑顔”は何を意味するのでしょうか。お話を伺っているうちに、その“笑顔”が彼の人生観そのものだということが感じられてきました。



Chang こと 兵藤禎晃 さん



話の取りかかりは、いつも通りのパフォーミングアートとの出会いについてですが、クラウンとの出会いは？

高校二年生の時に、当時K(ケイ)が立ち上げたプレジャーBに入っ
て、ジャグリング、バルーン、パントマイムを教わり、そこで初めてクラウン
というものの存在を知りました。ただその時は、別にクラウンになるつもり
は無く、人が集まって楽しく練習すること自体が楽しくて、振り返ってみ
るとクラウンになるんだと決めたことも無く、なんとなくクラウンって好きだ
なぁ、クラウンになれたらいいなぁ、と漠然と思いつつ今に至っています。

実は僕、小学生の時には将来コックさんになりたいと思っていました。で、
高校卒業後に2年間調理の勉強をしていて、イタリアに行くことを目標にお金
を貯めようとして、プレジャーBで働いていたらいつの間にか28才になってしま
った。(笑)

「コメディークラウンサーカス」という作品が、いかに観客に楽しんでもらうかというコンセプトから成るものだとすれば、まるでびっくり箱から飛び出てきたような、底抜けに明るいキャラクタのChangはどうやって生まれたのでしょうか。Changというキャラクタは自分そのものの？

そうですね、「素」に近いですね。

僕は明るい空間(空気)が好きなんです。例えば誰かが言い争ったりすると凄くへこむんですよ。それが自分に対してでなくても、とてもつらい思いをするので、自分の周りでは極力そういう空間を作りたくないと常日頃から思っています。

そんなところには自分はいられないし、そういう状況を何とかしたいと思うから、少しでも自分と関わる人には目があえば笑顔をつくり、ムスッとしている人がいれば、その顔がちょっとでも緩めば嬉しいんです。結局それは自分のためなんですけれどね。

だから(そういう行動を)いつも普段から心がけてやっているし、それがあのキャラクタだと思います。自分が求めているものはクラウンのスタイルだとやりやすいし、(言い換えると)キャラクタは自分そのものなんだけれど、こうなりたい、こうしたいという、自分の中に無いものにあこがれるっていう感じで・・・そうですね、Changみたいなになりたいということなのかもしれないです。

作品「コメディークラウンサーカス」には随所にジャグリングが出てきますが、ジャグリングの演目としては5人のクラブパスが見ものでした。作品におけるジャグリングの位置づけは？

舞台の作品で求められることは、スタンダードなものなんだと思います。

クラウンっていうイメージ通りのものを、お客さんが望んでいるものを表現しようと、みんなで手分けして何でもやろうとします。つまりサーカスっていうイメージ、クラウンっていうイメージ、大道芸っていうイメージ・・・お客さん皆がそれぞれ心に描いているものを全部やっちゃおう、お客さんの期待を裏切らないようにしようというのがあの作品なんです。

作品中では、ジャグリングはジャグリングのショーとして見せています。

チームでやるクラブパスは、テンポがよく照明も華やかにできて舞台栄えがするので、楽しくて面白いものになっていると思います。でもクラブパスだと各人のキャラクタ(個性)は出しにくいですが、キャラクタをもっと見せようとする、その中に関係性を明示しなくてはならないし、そのためにはジャグリングをしない時間が必要になってきます。

キャラクタを前面に出してのネタは、他の演目でいくらでもやっているんで、あれ(クラブパス)はテンポの良さ、気持ちの良さ、あぁ見たなぁ！っていう感じの明るさを見せたいので、そういったキャラクタのネタは必要ないと思っています。

その見せ方はクラウンじゃないと言われるかもしれないけれど、そんなことはないと思うし、最近演技がこなれてきたせいか、見ていてスゲーッ！だけでは終わらずに、あぁこいつら仲いいね、楽しそうにやっているねと思ってもらえるような仕上がりになってきたので、そういった楽しさ自体が作品の目指すところだからいいと思っています。

クラウンの定義は難しいと思いますが、兵藤さんにとってクラウンとは？

ジャグリングやマジックやバルーンだけじゃなくても、クラウンは人を楽しませることができると思います。

それはおしゃべりや気遣いだったりするかもしれない、いやゴミ拾いだって、それを見てすごく気持ちがいいと感じる人だっているだろうし、何でもいいんです。

相手がいてこそそのクラウンであって、決まりがないところで、いろんな方法を使ってからこそクラウンは役に立ってるんだと思います。



やるだけやっただけ結果が出ている。それだけなんです。認めてもらえれば嬉しいし、さぼったら痛い目をみると、凄くシンプルなんです。だからこそちょっとでもいい状態にいたいし、いいことしたいし、技術も高めたいし、そんな思いが全部つながって、何かの役に立つんじゃないかなと思っています。自分は特別な人にも凄い人にもなれないかもしれないけれど、ちょっとは役に立ちたいし、ひょっとしたら立っているかもしれない。

クラウンってテクニックじゃないから、あと20年くらいかかるかな、クラウンになるのは、でも年をとればいいわけではなくって、人生経験というのか、それがずっしりと出てくるのがクラウンで、自分の場合たぶん50才くらいになるんじゃないかな。個性を作るというのではなく、ぐっと自分の個性がにじみ出る、今までの経験と感性がにじみ出る…そういうのをクラウンっていうんでしょう。クラウンは存在自体がいいもの(大切)なんです。

兵藤さんはプレジャーBのいわば一期生で、表現者と同時に、40名程いるメンバーにとっては大先輩であり指導者でもあり、現在は経営の一端を担う経営者でもあり、毎日毎日忙しく飛び回っていらっしゃいますが、常日頃から心がけていることは？

舞台などではその日の心持とかは絶対にお客さんに伝わります。

だから普段(日常)から明るくしようとか心がけていないと、その時だけ取り繕ってやろうとしてもダメなんですね。本当に楽しそうにやっているねえとお客さんに言われるのが嬉しくて、だからこそ普段から楽しい気持ちで過ごそうとしています。

でも(楽しい気持ちを)自分で無理やり維持しようとしているわけではなくて、やらなきゃいけないことをやろうとか心がけているだけなんです。やった結果が大きい時も小さい時もあるけれど、とにかく結果は何かしら返ってくるわけでそれに励まされて、次ができるんです。

例えばグリーティングなどで「おはよう」って言って、少しでもニコツとしてくれたら、声をかけてよかったと楽しくなれるし、少し役に立ったのかなとも思えます。つまりその時々状況に見合う楽しさの量に納得すればいいんじゃないかな。無理やり能動的に楽しさを人に伝える…そういう事ではなく、例えば小さい子がニコニコ寄ってきてくれたら、こんな僕でも役に立っているのかと嬉しいし、そんな時に力をもらっているんです。

実際舞台公演が特にそうで、エネルギーを出しているようで実はいっぱいもらっているんです。作品のルーティンをボールだとすれば、自分で転がさなきゃならないのは最初だけ。よしよっと最初だけ転がせば、後はどんどんお客さんが転がしてくれる。そう、後はお客さんが何とかしてくれるんです。



プレジャーBのWeBサイトを拝見すると、兵藤さん自身いろいろな活動をされていますが、目指すところは？

サーカスが好きなんです。

で、まずは(自分自身を)「クラウン」と言えるようになりたいし、それとサーカス芸を勉強できるうちはひたすらチャレンジしてみようかなと思っています。どこかのサーカス団に入るということではなく、いつかはシアターで自分のショーができるように、それまではサーカスを勉強して、自分なりのサーカスの表現を仲間とやっていきたいんです。

「Le Cirque b(シルク・ベール)」というユニットでは、アクロバット、ジャグリング、ダンス、クラウニングなどを融合したサーカスを表現して、今のところはスタジオを使っただけの公演ですが、ゆくゆくは学校公演をしたいと思っています。

また世界に通じる大道芸をやりたくて「PRE-MIX(プレミックス)」という3人ユニットを組んで最近活動しはじめました。メイクというクラウンの世界での伝統を捨てた、つまりノーメイクでクラウン・スタイルのパフォーマンスをして見ている人を楽しませる。そんな狙いのユニットです。今年の静岡大道芸ワールドカップに出ます。

「コメディークラウンサーカス」の5人は本当に仲がよさそうですね。

プレジャーBには決まった先生がいなくて、上達するのは難しいと思っただけで、仲間がいて、練習する場所があって、それぞれが研究して持ち寄って、そんな中でやっていくうちに自分は成長したんだなぁと思うし、おかげで自分なりのスタイルが確立されてきたのでチームのみんなには感謝しています。



クラウンをやって普段の自分が変わった、ってみんな言います。明るくなったし、前向きになったし、自分自身が望む形になっていくような気がして、周りの人たちと一緒に成長していく、そんなクラウンの考え方が大好きですね。

舞台でのK(ケイ)はおとぼけ感とごうまん感で、凄いこともどうでもいゝことも全力でやって、LONTOは繊細な技術を持っていてコミカルで可愛らしく、Tamaはハチャメチャでどうしても皆からヒヤヒヤされたり同情されたり、Canonはちっちゃい子から愛されるカワイイ女の子…。みんな100%はじめていて羨ましいですよ。みんな凄い！あのチームにいては本当に嬉しいです。

いかがでしたか。冒頭で彼の“笑顔”について触れましたが、笑顔そのものがChangだということがお分かりいただけただしょうか。

最終に近い帰りの新幹線の中で、感受、共感、優しさ、思いやり…そんなことを考えながら、最近読んだ本に書かれてあった「惻隱の心」という言葉をふと思い出しました。年齢が二回り(ふたまわり)以上も離れた兵藤さんから、いやChangから大切なことをたくさん教わったような気がします。ありがとう。そしてChang、なるべく多くの人にその“笑顔”を届けて下さいね。

【おまけ:クラウンKについて】

クラウンK(ケイ)こと大棟耕介さんには、ずーっと前にお会いしてから毎号ジャグパルをお送りして(頼まれてはいないのですが^_^)、いつかインタビューをしたいと思っていた人物の一人ですが、最近の活躍ぶりには目を見張るものがあり、プレジャーB内でのインタビュー候補としては除いちゃいました。

なにしろ、(有)プレジャー企画 <<http://www.pleasure-p.co.jp/>> の代表取締役、NPO法人 日本ホスピタル・クラウン協会の理事長でもあり、そして講演会やインタビュー も数多くこなし著書も2冊！これだけ活躍されていたら、もう聞きたいことなくなっちゃいました…ウソウソ、今度お話し聞かせて下さい。m(_ _)m

著書:

1. 「ホスピタルクラウン 病院に笑いを届ける道化師(サンクチュアリ出版)」

本書が原作となり、2008年3月14日にTVドラマ「笑顔をくれた君へ～女医と道化師の挑戦～(常盤貴子・宮迫博之 主演)」が放映されました。

2. 「道化師流サービスの力 空気を読み笑顔をつくるおもてなしテクニック(こう書房)」

インタビュー記事(一例):

「好きが高じてわらしべ社長 / 大棟耕介」

<http://promotion.yahoo.co.jp/charger/200704/contents03/theme03.php>



【ジャパン・ジャグリング・フェスティバル(JJF) 2008】

NPO 日本ジャグリング協会主催の JJF 2008 が10月11日(土) - 13日(祝)の三連休に神戸で開かれました(10日にも非公式練習会をメリケンパークで開催。14日は雨天で中止)。1999年に東京で第1回大会が開かれたJJFも今年で10回目の節目を迎えたわけですが、参加者数が第1回の四十数名から400名弱へと10倍に増えただけでなく、運営のノウハウも蓄積され、ボランティアや参加者が自発的に動き回る様子が見てとれました。一方で、受付業務を外部業者に委託してオンライン化を図るなど、ボランティア負荷の軽減も試みられました。過渡期ゆえ一部に混乱もあったかも知れませんが、参加者増に対応するためには革新が必要です。

参加者のレベルの向上にも目を見張るものがありますが、下は幼稚園児から上は中高年に至るまでさまざまな年齢層とレベルのジャグラーがジャグリングを楽しんでいる光景は、JJF がジャグリングの祭典としてすっかり定着したことを感じさせます。

私は所用で初日に参加できず、チャンピオンシップを観戦することができませんでしたが、技術的なレベルも独創性も素晴らしい戦いが今年も繰り広げられたそうです。シガーボックス、デビルスティックが盛んで独創的なのは日本独特の傾向といえましょう。なお今年から、使用音楽の著作権確認が義務付けられました。出場者にとっては自由度が減り面倒が増えますが、音楽著作権の適正処理は IJA でも求められており、避けては通れません。

個人の部

- 1位 青木康明(ボール)
- 2位 古谷創(シガーボックス)
- 3位 萩原大輔(シガーボックス)
- 審査員特別賞 内海究(ディアポロ)

チームの部

- 1位 Flip Flop (斉藤淳・生田目洋子:デビルスティック・ペア)

2日目の夜は、海外ゲスト2名、国内ゲスト3名によるゲストステージでした。神戸市内から六甲山系を一山越えた北区民センターすずらんホールは、開演を待ちわびるジャグラー達でほぼ満員。全員が入場できて何よりでした。

コメディアンでもあるジャグラー森俊行さん(MC)による、ジャグラーの笑いのツボを突いたアナウンスで幕を開けたステージに現れたのは、1本のクラブと大きなお猿さん。映画「2001年宇宙の旅」の冒頭のように、「道具」の使い方を発見して興奮した猿人が立ち去った後、静かにたたずむ3体の宇宙人が現れて、国内ゲストによるショーの始まりです。

トップバッターはゴーグル風の大きなサングラスに銀色スーツ、銀髪の人。両手4つずつまでのクリスタルボールを掌中で自在に操ります。二番手は全身を銀色に塗った(おこたんぺ。)こと布施善之さん。アイソレーションが見事に効いた動きで、ただ1つの大きなクリスタルボールを自由自在に転がしては止め、止めては転がして、腕や身体の上を這い回らせる様は、思わず目をこすりたくなるような不思議さでしたが、強力な照明で乾燥した銀のクリームが鱗のように剥げてしまったのは計算外で残念でした。白いフードに身を包んでいた今村勇太さんは、暗闇の中に光るポイでさまざまな光の渦巻きを描いて踊りまわり、静の演目であるコンタクトジャグリングと対照的な躍動感あふれる動の演技を見せてくれました。

森さんとその仲間達によるジャグリング・コントで一息ついた後、次に登場したのは台湾からのゲストで、ディアポロのエキスパートであるWilliam Wei-Liang Lin(ウィリアム・ウェイリャン・リン)。暗い舞台に現れ、1つと2つのストロボ・ディアポロで美しい光の軌跡を描いた後は、明るい舞台で2つ、3つのさまざまな技を見せてくれます。

数年前であれば3つのディアボロが回るだけでも大喝采だったのですが、現在のトップレベルの技は素晴らしく、3つのディアボロが高く低く飛び回り、時に立ち止まり、互いを追い越し、入れ替わる様は圧巻でした。ディアボロ1つでも、垂直回しの状態のままスティックグライド、スティック両手離し、投げ上げて空中キャッチなど、革新的な技が次々と繰り出されます。青年期に入ったことを意識し男っぽさを演出した、テンポの速い曲による新ルーチンの初演だったそうですが、ミスもわずかで見事だったと思います。

繰り返しの妙で笑いが増幅していく森さんらのジャグリング・コントの後は、いよいよ Wes Peden(ウェス・ピデン)の登場です。アメリカ人で、IJA チャンピオンシップや WJF で活躍し、今はスウェーデンのサーカス学校に留学している新鋭の彼は、普段着のような衣装で登場し、道具類も自分で床の上に配置して、30分以上に及ぶ長い演技を始めました。クラブ2本のマニピュレーションから7ボールまで、道具を持ち替え、数を増減して続いていくジャグリングは、朗読され続ける長い詩のように見えました。見慣れない動きや目新しい技が次々と繋がられていき、同じ技は二度と現れない様子を見て、彼が編み出して身につけた技の豊富さを実感させられるとともに、7ボール・カスケードや5クラブ・バッククロスが山場としてではなく「全体を構成する部品の一つ」として何気なく淡々と演じられる様に、ゆるぎない技術の裏付けを見ました。ショー全体のフィナーレが拍手喝采だったことは言うまでもありません。

私は最終日の13日に初めてジムへ行きました。グリーンアリーナ神戸体育館は、緑あふれる大きな運動公園の一角にあり、50メートル・ジョグリングのレーンが取れるほど広く、十分な大きさでした。Wes Peden によるワークショップでは、「スタート、技1つ、フィニッシュ」という極小のルーチンを出発点に、順序の入れ替え、高さや向きの変更、大きな動きや小さな動きの追加、速度の変更、軌跡の変形、といった変化を加えていって、まったく新しい動きの流れを作り出す手法を体験しました。William のワークショップは「3ディアボロの応用技」という極めてレベルが高いものでしたが、様子を見に行ったら20名以上の受講者がディアボロ3つを手に集まっていて仰天しました。練習場では4ディアボロが打ち上がっているのも見かけ、「裾野が広がれば山は高くなる」ことを実感したものです。

フリーパフォーマンス、ゲーム大会、ナンバーズ&エンデュランスなどのイベントも3日目に行われましたが、フリーパフォーマンスでの一部演目のレベルの高さや、いつまでも続くように思えるエンデュランスにも、全体のレベル向上を感じました。

来年は、千葉県での開催だそうです。

[西川 正樹]

早めの編集後記

八月二日、赤塚不二夫逝去(享年七十二)。

実は赤塚作品の中で、「おそ松くん」以外の作品には全く興味がなく、私にとっては「赤塚不二夫 イコール おそ松くん」です。本当に大好きだった。夢中で読んだ。特に「チビ太」は愛おしい限りで、あんなにカワイイ奴はいない。(某コンビニおでん販促用キャラクタで見かけますね。)訃報を機に考えてみると、様々なパフォーマンスアートを見て感じる、笑いにしてもキャラクタにしても、自分の価値基準はほとんど「おそ松くん」を読んで作られたような気がします。ご冥福をお祈り致します。

編集発行人: 安部保範(神奈川県横浜市栄区 在住)

Webサイト: JugPal <<http://www.chansuke.net/jugpal/>>

見世物広場 <<http://www.chansuke.net/>>

E-mail: misc@chansuke.net



赤塚不二夫さんの初めての著書であり、私が自分のお小遣いで初めて買ったマンガ以外の書籍。

「シエー!!の自叙伝 ぼくとおそ松くん」
赤塚不二夫著(昭和41年)



今年出版された泉麻人さんの著書。ここにも「おそ松くん」を愛する人が。(感涙)

「シエーの時代「おそ松くん」と昭和子ども社会」
泉麻人著(平成20年)



私の宝物!! 赤塚不二夫さんから送って頂いたファンレターの返信葉書。(昭和40年)チビ太がカワイイ



書籍紹介

カリスマ手品師(マジシャン)に学ぶ超一流の心理術
スティーブ・コーエン著 宮尾育子訳
株式会社ディスカヴァー・トゥエンティワン 1500円
ISBN978-4-88759-523-1

Win the Crowd - Unlock the Secrets of Influence, Charisma, and Showmanship
Steve Cohen, The Millionaires' Magician
Harper Collins Publishers, 14.95 US\$
ISBN-13: 978-0-06-074205-8
ISBN-10: 0-06-074205-4



この本は、マジックのタネややり方を解説した本ではありません。この本で覚えられるマジックは、ごく簡単なもの2つだけです。しかし、それよりもっとすごい「魔法」を学ぶことができるかもしれません。

著者は「億万長者のための手品師」というキャッチフレーズを持ち、アメリカを中心に世界各国で富豪や有名人のパーティーに招かれてマジックや読心術を演じるプロ・マジシャンです。

コーネル大学で心理学の学位を取得し、日本への留学経験もある彼が惜しみなく明かしてくれるのは、「観客に好かれ、観客を味方にした上で楽しませるにはどうすればよいか」という商売上の秘密です(出演料を上げる方法という、本当の「商売上の秘密」も明かされています)。

「観客を愛そう」「自分が重要な人物だと信じよう」などの精神面の心構えについてはもちろん、舞台であがらない方法、登場する際の歩き方、舞台上での立ち方、観客とのアイコンタクト、声を通る話し方、間の取り方、盛り上がる演技構成などの技術面についても、本書ほど具体的な方法と明確な理由を述べた本はなかなかありません。タネやテクニック以上に話術が重要となるマジックという演芸での豊富な実演経験を持ち、古今東西の書物を読んで勉強し、数多くの一流人物と交流して深い洞察力を身につけた著者だからこそ書けた本だと思います。

本書の優れた点のもう1つは、各章の内容について具体的なポイントと裏付けとなる理屈を述べた後に、その内容を読者が身に付けて自分のものにするための練習方法を説明していることです。それは、ちょっとしたマジックを演じることであったり、見知らぬ人の顔を見つめることであったりして、ごく気軽に試せるものもあれば、だいぶ勇気が要るものもあるのですが、読んだだけで分かったような気になるより、実際に体験する方がずっと深く理解でき身に付くだろうと思います。

内容は多岐に渡り、実践的ですが、本書はマジシャンや舞台人向けの専門書ではありません。むしろ、会社でプレゼンテーションをしたり、お客さんに商品をセールスしたりする一般のビジネスマンを対象にしています。会議室や店頭を舞台、話をする自分をパフォーマーと考えれば、まったく同じ手法を仕事に役立てることができるのです。

日本語版はビジネス書の出版社から出版されており、装丁や紙質もペーパーバックの原書よりずっと立派で、イラストも描き足されています。日本語訳の質も一部を除いて問題なく、自然に読める仕上がりがです。ただし、読者層をビジネスマンに絞ったためか、原書の第5章「舞台に立つ前の心身の準備」が丸ごと省かれてしまっています。この章は、舞台に立つ前に著者が実践している準備ルーチンを詳細に述べており、表情筋の運動、発声練習、深呼吸、緊張を取り除く指圧、顔をよくなる保湿クリームなど、とても参考になった部分なので、日本語版からなくなってしまったのは大変残念です。

また、章間の箸休めとして楽しめる、さまざまな有名人の前で演じたマジックのエピソードや、巻末の参考文献リストも日本語版では落とされています。「効果を損なわないため、本書は他人の目に付かないように隠してください」という注意書きが日本語版から消えているのは、営業上の都合でしょうか(笑)。

原書はamazon.comなどでも購入可能ですので、興味のある方はどうぞ。実用書ですのでそれほど難しい言い回しや単語は使われていません。

巻頭から巻末まで、役に立つアドバイスや考えさせられる逸話が詰まっている本書ですが、全体のごく一部に、文化的背景や人種的特徴のために「日本では通用するかな？」と疑問に思う箇所もあります。

「観客から見て左から右の動きは自然に見えて信頼できる」という法則は、左書きの欧米人には有効でも、縦書きの日本人や右書きのアラブ人に当てはまるかどうか不明です。「瞳孔の大きさで味方を見分ける」コツも瞳が黒い日本人には不向きでしょう。「××しますか？それとも…」と語尾を濁して相手に「いいえ」と言わせる技も、日本語の論理ではちょっと難しい気がします(ここは英語で読まない、なぜ効果があるのか理解できませんでした)。

せっかく著者が日本通で日本語にも堪能であるということなのですから、このあたりこそ日本向けに加筆・修正してくれていれば、さらによい本になっただろうと思います。

とはいえ、「プロのマジシャンはこんなことにまで気を配って演技しているのか！」と感心した上で、「じゃあ、日本だったらどうすればよいただろう？」と自分で考えてみるのも面白いですし、著者が日本で茶道から学んだ考え方を欧米の読者向けに紹介している箇所もあり、興味深いです。

最後に、各章の内容を簡単に紹介します。私には3章と7章が特に面白かったです。ビジネスマンでも演技者でも、読んでみれば必ず得るものはあると思います。

・MAGIC 1 超一流のマジシャンはどうやって観客の心をつかむのか？

よいマジシャンあるいはよいプレゼンテーターが従うべき5つの行動原理について説明し、それらを身に付ける方法を述べます。

・MAGIC 2 最高の自分をもって場にのぞむ

舞台の上でも下でも、魅力的で信頼できる人間であると他人から思われるようになるための心がけを、さまざまな逸話を通じて説明します。

・MAGIC 3 聞き手に信頼と好印象を与える

ショーやプレゼンテーションを成功させるには最初が大事です。登場した瞬間から観客の心をつかまなければいけません。登場するときの歩き方から始めて、アイコンタクト、呼吸法、発声法にいたるまで、気を配るべき点はたくさんあります。

・MAGIC 4 相手の心理を自在にあやつる

プレゼンテーションを上手に行なうためのさまざまなテクニックを説明します。無意識のうちに観客を安心させ、味方に付け、退屈させないことが成功の鍵です。

・MAGIC 5 相手の気持ちを引きつけて離さない

場の中心となるカリスマ性を身につけるために、どんな要素を身に付ければよいか、どのような心がけをすればよいかを詳しく説明します。

・MAGIC 6 相手の状態や頭の中をスパッと見抜く

著者が得意とする読心術の基本です。なるほどと思って興味深く読みましたが、実際に応用するにはだいぶ練習する必要がありそうですし、日本人では反応のしかたが違うかもしれません。

・MAGIC 7 会話を思いどおりの方向に導く

相手に自分が望むことをしてもらったり、自分が望む答えをもらったりするための方法。マジックの技法のように、相手に勘違いをさせたり、ひっかけたりする手段では**ありません**。相手の自由意志をほんの少しだけ自分に有利に誘導したり、なんとなく反射的に断られるのを防いだりするための、ちょっとしたものの言い方なのですが、それが大きな違いを生みます。

・MAGIC 8 相手の視線や興味を思うままに操る

マジックの原理であるミスディレクションの基礎を簡単に説明し、観客の気をそらすことではなく、観客の興味を引き続けるために活用します。

[西川 正樹]



シルク・ドゥ・ソレイユの今

10月1日に常設劇場によるシルク・ドゥ・ソレイユのショー「ZED(ゼッド)」が、3ヶ月のトライアウト公演を経てグランドオープンを迎えました。

また来年には「CORTEO(コルテオ)」の日本ツアーも控えて、最近「シルク・ドゥ・ソレイユ」の文字をあちらこちらで目にする機会が増えたような気がします。特に東京ディズニーリゾートを経営・運営しているオリエンタルランド社の観劇市場への参入は、ビジネス・トピックとしてテレビや雑誌やネットを賑わしているようです。

個人的にはシルク・ドゥ・ソレイユとはファシナシオンを観て以来のお付き合い(?)ですが、彼らの“今”を知りたくて調べようとしたら、「シルク・ドゥ・ソレイユ サークスを変えた創造力」という書籍が出版され、これを読めば最近の状況が分かってしまいました…。とは言うものの丁度いい機会なので、シルク・ドゥ・ソレイユに関わる“積読(ツンドク)状態”になっている本棚の書籍や、新聞あるいはネット検索などから、今一度彼らの現状、特に彼らのアジア戦略について調べてみました。

なぜなら、とあるサーカス関係者から、アジアを訪問しているとシルク・ドゥ・ソレイユの前線活動と出くわし、彼らの触手がアジア方面にも確実に広まっていることを直に感じるということを聞いて以来、心に引っかかっていたからです。

シルク・ドゥ・ソレイユのアジア市場に対する考え方は、各メディアから容易に探し出すことができます。

『次の目標はアジアでの拡大。』社長兼最高経営責任者ダニエル・ラマー氏

『シルク・ドゥ・ソレイユの未来はアジアにある。』同氏

『アジアでのチケットの売り上げは全体の10%だが、3~5年以内には30%まで引き上げたい。』同氏

『インドは何年か先を考えています。タイは5年後くらいでしょうか。マカオにアジアの拠点を置いたので、今後5~10年は全アジアをターゲットにします。』マリオ・ダミコ氏

それらの言葉を裏付けるかのように、今までにアジア13都市(シンガポール、香港、台湾、ソウル、東京、台北、上海など)でツアーショーを成功させ、今年になってマカオと東京ディズニーリゾートの常設劇場で以下の常駐ショー(permanent show)が立ち上がりました。

・「Zaia(ザイア)」@ヴェネチアン・マカオ・リゾート・ホテル(8月)

・「ZED(ゼッド)」@シルク・ドゥ・ソレイユ シアター東京(10月)

また2009年にはマカオで二つ目の常設劇場による公演をフォーシーズン・ホテル・マカオで始め、いずれは常駐ショーを上海と北京で立ち上げる予定とのこと。

なおマカオには「The Asia Pacific Regional Office」を立ち上げ、25名のスタッフでショーに関わる従業員400名をマネジメントし、ここをハブ機能を持ったアジア戦略本部として位置づけて活動を展開しています。

いずれにせよ、アジア戦略に関しては中国進出が一つの決め手なのでしょう。近年中国からの来場者数が急増している東京ディズニーリゾートや、カジノの売り上げでラスベガスの二倍以上をたたき出しているマカオでの公演は、いずれも中国からの訪問者を当て込んだ中国進出へのショーケースの意味合いもあるのかもしれない。

ラスベガスには5%の旅行者がシルク・ドゥ・ソレイユのショーを観るためだけに訪れていて、マカオもそうした状況にしたいところですが、中国本土の人がどの程度受け入れてくれるか今のところ予想できず時間がかかりそうとの見解で、どうやら中国への進出については慎重の姿勢です。

なぜならば、中国には国民的娯楽である超絶技巧満載の「雑技」が存在し、まずは大衆にシルク・ドゥ・ソレイユのパフォーマンスを理解してもらうことが必要だからです。そこで彼らはシルク・ドゥ・ソレイユが古い歴史を持つ雑技に尊敬の念を抱き、演技に影響されていることや、20年以上中国パフォーマーと一緒に仕事をしていることを訴え続けながら、もっとマーケティングに努力しなければいけないと実感しています。

また細かなことですが例えば、Zaiaとは「生命」を意味するギリシャの名前ですが、zaiaという言葉は中国語の響きを持ち、そして雑技を国際的にはcircusと訳している現状からcirque(=circus)という言葉は使わずに自ら「太陽劇團(The Sun Theater Group)」と称しているなど、中国側への細かな配慮を感じます。

ところで、シルク・ドゥ・ソレイユには、専属のタレントスカウトがいていつも世界中を飛び回り、様々な競技スポーツの世界大会などから優秀な逸材をハンティングしています。「4,000 pairs of ears and eyes」というツアーメンバーも含む従業員自ら見聞きしたことを報告するプログラムがあり、建築、ファッション、音楽など様々な分野で何が起きているかを常に把握するなどして、マーケティングに重点を置いていることが分かります。きっと今もアジア各地に彼らは足を運んで、ハンティングと同時に現地でのネットワーク作りを精力的に行っていることでしょう。

確かにシルク・ドゥ・ソレイユのパフォーマンスはとても魅力的で、私も既に16回ほど観ていますが、彼らが作り上げてきたブランドと呼べるほど影響力のあるサーカスのグローバリゼーションは少々気にかかります。一体これからどれくらいの数の常設劇場を建てさせての(彼ら自身では建てないというビジネスモデルです)常駐ショーを計画しているのでしょうか。実際はどのようなやり方かは知りませんが、調べた範囲内では、「ブルー・オーシャン戦略」と讃えられている割には、その海原を大船団(資金力と力業)でぐいぐいと押し進むような航海は、前時代的なグローバリゼーションのやり方を感じてしまいます。

彼らの上陸した地域では芸術・芸能活動に対してどのような影響が出てくるのでしょうか。経済分野ではローカリゼーション、あるいは最近はグローカリゼーションという概念が流行のようで、地域との関わり抜きに海外での企業活動はありえない状況ですが、ローカルという切り口での関わりについてはどのような目論見を持っているのだろうか。

芸術・芸能などの文化は、外来文化など異なる文化と交流しあい、その土地における政治経済など社会的側面との相互作用の中で常に変容するものだと考えるならば、世界各地にばらまかれる常駐ショーによってどのような地域内での交流・連携が発生してくるのか、今後の気になるところです。

余談としてその他のトピックをご紹介します。

1. ケベック州がサーカスを文化振興の牽引役のみならず主要産業として位置づけた政策を推し進める中、「サーカス芸術都市計画TOHU」などのプロジェクトへ参画。
2. 利益の1%を寄付するなどの社会貢献活動(CSR)への取り組み。
3. アラブ首長国連邦のドバイの政府系ファンドから出資を受け、建設中のリゾート人工島「パーム・ジュメイラ」での常駐ショーを計画。ここにもオイルマネーが。
4. マジシャンのCriss Angel(クリス・エンジェル)さんとコラボレーションした「BELIEVE」がラスベガスでオープン。ラスベガスで六つ目の常駐ショー。ビートルズをテーマにしたナイトショー「Love」などサーカスとは一線を画したショーも立ち上げる中、ついにマジックとのコラボ。しかもクリス・エンジェルさんとは、彼はTVのブラウン管やスクリーンといった映像の中で個性を発揮するマジシャンでありステージはどうだろうか。かつそもそもマジックとアクロバットは、水と油の如く、個人的には非常にリスクな組み合わせだと思う。

書籍

- 【シルク・ドゥ・ソレイユ サーカスを変えた創造力】西元まり / ランダムハウス講談社
【白い扉の向こう側 ようこそシルク・ドゥ・ソレイユへ】リン・ヒュワード(著),有賀裕子(訳) / ランダムハウス講談社
【ブルー・オーシャン戦略】W・チャン・キム,レネ・モボルニュ(著)有賀裕子(訳) / ランダムハウス講談社
【ケベック発 パフォーミングアーツの未来形】西元まり,西田留美可,藤本紀子,広戸優子 / 三元社
【アートサーカス サーカスを超えた魔力】西元まり / 光文社

新聞

【太陽のサーカス(上),(下)】読売新聞夕刊 2008.10.9~10.10

インターネット

- 【THE FOCUS online】「Interview with the President and CEO Daniel Lamarre」
<http://www.ezifocus.com/content/thefocus/issue/article.php/article/54300699>
これは読み応えがある非常に良いインタビュー記事。こういった質問ができるようになりたい。(^^)
- 【USA TODAY】「Cirque du Soleil opens new show in Macau」
http://www.usatoday.com/travel/destinations/2008-05-29-cirque-du-soleil-macau_N.htm
- 【from-montreal.com】「Interview with Charles-Mathieu Brunelle (TOHU関連)」
<http://www.from-montreal.com/people/040.html>
- 【NB online】企業としてのシルク・ドゥ・ソレイユ(無料会員登録が必要)
<http://business.nikkeibp.co.jp/article/manage/20081006/172776/>

テレビ

- 【ガイアの夜明け】「東京ディズニーリゾート次なる野望～ショービジネスへの挑戦～」2008.10.14放送
【世界ふしぎ発見!】「シルク・ドゥ・ソレイユの魅力のすべて!人生に楽しみを!」2008.9.20放送



上野鈴本演芸場 上席(7月4日/上野鈴本演芸場)

週に一回以上は何らか劇場へ足を運ぶようにしているのですが、どこもあてが無い時は寄席“でも”行くかということになります。この“でも”が寄席の良さを表わしています。要は行っても行かなくてもいいんだけど、時間つぶしには丁度いいかも。行けば行ったでいるんな芸人さんが出てきて、いろんな囁が聞けるので、ひよっとしたら新しい収穫があるかも、といったユル～イ気持ちで行けるのが寄席のイイところ。

山本悠加ピアノリサイタル(7月18日/横浜市栄区民文化センター リリス)

会社帰りに何気なく立ち寄ったデビュー間もない若き女性ピアニストのリサイタル。彼女は毎曲演奏する前に、何かのジンクスなのでしょ、鍵盤を前にして手のひらをゆっくり揉んだり、斜め前方に顔を上げ目を閉じたりと、演奏前の緊張感が伝わってくるようでした。演奏が始まると一音一音を大事に奏で、時には感情が溢れ出るが如くダイナミックに迫り、何より「これが自分の選んだ道」といった気概が感じられた演奏でした。

マールイ・サーカスの一日(7月21日/東京都児童会館ホール)

沢入国際サーカス学校の生徒さん達による東京公演。演出がとても良かった。特にひとつひとつの作品のつながりに違和感がなく、全体の流れがとてもスムーズで観ていて気持ちが良く、全体として良質の舞台公演だったと思います。

内容としてはやはり空中ものがあるとダイナミックさが加わり格段とサーカスらしくなり、舞台が立体的に飛び出てくるようで迫力がありましたが、トラピーズ、ストラップ、シフォン、一本ロープと空中ものが多いような気もしました。思うにこれら空中もの四種類という数は決して多くはないはずですが、演者の披露する技が似たようなものが多く、違いがロープか布かであって見た目が似ていることと、技のバリエーションの少なさからそう感じたのかもしれない。

ところで、ジャグリングはミス(ドロップ)が目立ちました。

失敗の度に観客が盛り上がっているようで、成功した時の歓声はより大きくボルテージが上がり、演者としてもやりがいを感じたのかもしれない。が、気になるのは本人たちはどう思っているのでしょうか、そこが気になります。大道芸的に失敗をテコにして盛り上がったから、それで良しとは思っていないことを願います。

どんなに大技で成功しても、ちっちゃなミスの方が観客の記憶に残ります。いやミスのみが記憶に残ります。これはサーカスのみならず、マジックだってコンサートだって、およそ舞台公演であればほとんどそう言っても過言ではないと思っています。

さらに言うならば、演出家はこの舞台では単に個々のサーカス芸を羅列的に見せたかったわけではなく、「何か」を表現したくて現在の生徒たちの技量という制限の中、様々な工夫を凝らしてこのような構成にたどり着いたと察します。つまり演出された個々のサーカス芸を連続性ある流れの中で披露する事によって、この「マールイ・サーカスの一日」というひとつの作品が完成するとすれば、致命的なほころびを随所で観客の前にさらけ出すことの意味合いは、非常に大きいものだと思えます。

HIROMI GO Concert Tour(7月26日/神奈川県民ホール)

郷ひろみ。35年間プロとして先端を走り続ける者の「プロ魂」に触れました。2時間半、観客一人一人に語りかけるような暖かさとお喋りをお喋りを交えて休憩無しで20曲を熱唱。あれだけ踊って走りまくりながら歌っても肩で息することなく、並のアスリートより鍛え抜かれている証拠です。しかもあの調子で2日で1回の公演を60回やりきるとは驚き！TV番組で35年間トップを維持するその秘訣を聞かれ、曰わく「他人には優しく、自分にはいつも否定的でいたい。」

上野鈴本演芸場 上席(8月1日/上野鈴本演芸場)

特に収穫なし。

ヨコスガジャズドリームス2008(8月3日/よこすか芸術劇場)

それぞれゲストにボーカリストがついての演奏。国府広子さんは今回第一のお目当てでした。人気があるだけあってとても聞きやすいジャズで、おぬきさんも同じタイプだったのでこの組み合わせは面白味に欠けた感じがしました。

一方寺井尚子さんとウィリー沖山さんの組み合わせは異色ですが、残念ながらミスマッチです。完全に、沖山さんが歌っている時は、ジャズ本来の魅力であるこの先何が起こるか分からない不透明感がない歌謡ショーといった感じで、寺井さんの魅力が完全に封じられていました。

前田憲男 BIG BAND は安定性抜群。聴き応えがありました。数曲演奏した後にペギー葉山さんの登場です。演奏し始めて数十秒後に舞台の袖から威風堂々とペギー葉山さんが登場した瞬間から、もはやこの会場は「ペギー葉山リサイタル」と化しました。スタンダードナンバー Begin The Beguine, When You Smile, Time Goes By 等々を流麗に歌い上げ、さすがに雰囲気(オーラ)があって、お喋りも上手で会場を笑いに包み込み魅力的なシンガーでした。お見それ致しました。

プレジャーBのコメディークラウンサーカス(8月9日/東京都児童会館)

これは、これは、とても楽しかった&面白かった。テンポ良く次から次へとパントマイム、ジャグリング、サーカス芸が入れ替わり立ち替わりと続きますが、技術的に高度であるにも関わらずひけらかすこともなく、いずれもユーモアに溢れていて満員の会場はやんやの喝采。

ディズニー・シー(8月17日(日)~18日/東京ディズニーリゾート)

一泊二日での初めてのディズニー・シー。自分のいるべき場所ではないなぁ、と違和感を覚えつつもほとんどのアトラクションとショーを制覇し、もう二度とこの地に足を踏み入れることはないだろう。

しかし屋外のショーの圧倒的なスケールには度肝を抜かれました。特に「ブラヴィッシーモ！」何やら「水の精と炎の精との出会い」とのことですが、映画やテレビで「オズの魔法使い」の世界を外部から第三者的に覗いているのではなく、本当に自分自身が魔法の世界に入り込んでしまったとの錯覚すら感じさせてしまうほどの出来ですが、魔法の世界を現実を作り上げてしまっているのだろうか。

「一億総白痴化」。テレビは人間の思考力や想像力を低下させる物として、その影響を大宅壮一さんは「一億総白痴化」と称したわけですが、その言葉を久々に思い出しました。本を読んで空想の中で描く魔法の世界は皆それぞれに違った世界ですが、目の前に繰り広げられるショーこそが魔法の世界だよ、と唯一化されているようで、ひねくれ者はちよひ引けてしまいました。

ZED(シルク・ドゥ・ソレイユ)(8月18日/シルク・ドゥ・ソレイユ シアター東京)

常設劇場だけあって、専用のががかりでかつ精巧な舞台装置と、超人的な技とが相まって、ここまでできるのかと驚きのパフォーマンス。何だかんだ言ってもシルク・ドゥ・ソレイユは「MUST」でしょう。観なきゃ損。そんな中一番人間臭さ(個性)を感じさせ、シルク・ドゥ・ソレイユの演出方針に反するのではと案じてしまう演技が綱渡り。旧来のサーカスの雰囲気を感ぜさせながらも、個人的には一番のお気に入りでした。

新宿末広亭 下席(8月21日/新宿末広亭)

ひえ~満員!で、今回の収穫は「すず風にゃん子・金魚」。今年でコンビ生活15年というベテランですが、キャラクターが前面に元気いっぱい飛び出た舞台はただただ大笑い

久保修「紙のジャポニスム」(8月21日/新宿ISETAN)

最近のちょっとしたマイブームが「切り紙」でした。世間でも流行っているようで関連書籍が軒並み出版されています。紙を数回折ってハサミを入れて、カッターで切って広げれば、シンメトリー模様の美しい切り絵ができて、カードに貼ったりすると喜ばれます。

久保修さんの作品は「切り絵」ですが、題材は風景・人物・日本の民家・旬の食材など様々で、紙のみならず様々な材料を取り入れ、切り絵に色彩感や質感や深みを表現し、従来のイメージを一新しています。

外山啓介ピアノリサイタル(8月28日/鎌倉芸術館)

昨年オール・ショパン・プログラムのサントリーホールを含むデビュー・リサイタルでは、各地のホールでチケットを完売させた若きピアニスト。クラシック自体詳しくはないし、リサイタルもそんなに行っていないのですが、今回の鎌倉芸術館でのリサイタルは普段と勝手(雰囲気)が違ったのではないのかな。拍手をするタイミングも合っていないし、ある曲では第一楽章で拍手しちゃったりして、彼も戸惑っているかのようでした。それでも彼の特徴である「繊細かつ色彩感豊かな音色」と評される音楽は十分に楽しむことができました。

上野鈴本演芸場 下席(8月29日/上野鈴本演芸場)

特に収穫なし。

体風の芽 Vol.6(9月5日/スタジオPAC)

演者の皆さんはそれぞれに存在感があり、舞台上でライトを浴びた瞬間から各自の世界観で会場を包み込んでしまい、様々なイメージの空間に誘(いざな)ってくれる案内人のようでした。

初めて拝見したパフォーマーの方々の中でもサーカス好きの私にとっては、特にシフォンの吉田亜希さんの演技には惹かれました。スタジオでは高さが無い分、上下方向の演技も制限され、空中もの(ベルト)特有の円錐を描くような動きもできないという制限が多い中での演技は、逆に他のシフォンでは観られないような吉田さん独特の表現が随所に感じる事ができました。

さて今回足を運んだ目的は、ズバリ「まる」さんを観るためです。

2006年の渡独前にジャグパルのインタビューでお会いして以来、例えば独の雑誌 KASKADE でまるさんの写真を見つけたりすると、「あぁ～、まるさんの作品を早く観たい！」と恋い焦がれる思いでした。

心にずんっ、とくる重厚な響きを感じました。感じたものを言葉で表現するのは難しいのですが、イメージとして見えたものは「武将の舞」でした。まさにこれから家名の存続をかけた決戦に臨もうとする武将が、本丸御殿の奥の間でただ一人舞う。そこには戦いへの高揚感といたずらに勇む心を抑えようとする抑制心が錯綜する、そんな舞。

公演を観終えた後の帰路で、自分が感じ取った感覚をイメージ化するとどうなるか考えて浮かんできたもので、言い方を変えると「生と死」を感じとり、赤いボールも今思えば「血」を連想してしまったのでしょうか、とても印象的でした。

上野鈴本演芸場 下席(9月12日/上野鈴本演芸場)

今回の収穫は「ねずみ」。左甚五郎の逸話で面白かった。

映画「落下の王国」(9月11日/銀座シネスイッチ)

これは良かった。お薦めです。ロケ地が24ヶ国にもおよぶ強烈な映像の数々と斬新で奇抜な衣装は目立ってはいるが邪魔することなくストーリーに溶け込んでいるから不思議です。これはまさしくおとぎ話。観る人がそれぞれの立場で、それぞれに希望と勇気を感じるおとぎ話。

ところで、少女役にはもっと可愛い女の子いなかったのかなぁ、なんて実は思っていたけれど見終わる頃にはこの子でなきゃダメだったんだなあと納得。

立川志の輔独演会(9月14日/鎌倉芸術館)

初見。観客との間に最低限の間合いは取っておく、懐には自ら飛び込まないといったような感じを受け、師匠の談志さんの影響を感じます。良い悪いということではなく、個人的に感じただけのことですが、嘸はさすがに巧い、引き込まれてしまいます。

創作落語「パールのようなもの」は、理路整然とした中にも矛盾(落とし穴)が潜んでいて、エッセーのだまし絵の言葉版といったところで、「理系クン」には特に大ウケかも。人情嘸「小間物屋政談」は聴かせてくれます。

Mr.BUNBUNソロライブ ポテンシャル(10月3日/銀座小劇場)

初見。松元ヒロさんやダメじゃん小出さんのような喋りを中心とした一人コント。

初めての東京での舞台公演でしたが、この人の大道芸はさぞかし面白いだろうなぁ、ぜひ観てみたい!と思いました。滑舌が良く声の通りも良く、キャラクタの分かりやすさといい、その七変化振りといい、観客との受け答えといい、何でも明るく笑い飛ばしちゃうような前向きさで、きっと大爆笑ものかと目に浮かぶようです。では舞台公演はどうかというと、どうだろう、機会があってももう一回観に行くかどうかは個人的にはビミョーです。でもあの舞台はハマル人にはハマルだろうなぁ、事実熱狂的なファンらしきお客さんも来ていました。自分探しのために九州から北海道まで自転車旅行を企てた青年の珍道中や三流マジシャンの悲哀に満ちた独り言など、ひょっとしたらこんな人いるかもという想定範囲内のキャラクタではなく、シャイな男性が意中の女性に告白できるように脳内でドーパミン放出を指示する人格化した制御器官?や道路工事でよく目にする交通整理の人形と舞台上げられたボランティアとのやりとりなど、現実からかけ離れた突拍子もない状況でのコントの方が、演者の発想の面白さが出て私は好きです。

マジック革命セロ the Xperience (10月9日/JCB HALL)

セロが出演する舞台公演を始めて観たのが、1996年の「ザナドゥ」というミュージシャンの三四郎さんとのコラボレーションによる“魔法の音楽劇”と称したストーリー性ある舞台でした。1994年にFISMのグランプリを獲得したので、直後のデビュー公演と言ったところでしょうか、その時のセロの美しさといったら感動もので、おかげでどんなマジックをしていたかは全然覚えていません。

「the Xperience」と銘打った二回目の全国ツアーで、初日から数えて二日目の公演でした。キャラクタ(二枚目路線)の相似性からデビッド・カッパーフィールドとどうしても比較してしまうし、逆にカッパーフィールドを意識しているような作り手の印象も感じました。フローティング・ローズもやってたし…二枚目マジシャンの定番か。

マジックがブームになっても、TVではほとんど見るできないシガレットやカードやロープなどのマニピレーションマジックを演じるのは非常に好感が持てます。

これらマジック(セロはこれらを“パフォーマンス・マジック”と称していました)は、マジシャンだったらアマチュア、プロを問わずにほとんど誰もが(二代目引田天功以外のマジシャン ^;)練習する分野で、ステージマジックの王道みたいなものですが、一般の人はあまり見る機会が無いので、逆に目新しく前回のツアーでも好評だったようです。シガレット一本、ロープ一本で観客をひきつけられるセロの技量は大したものだと前回ツアーに引き続き再認識しました。

しかし…ショーの仕上がりは「雑」なもので居心地が悪かった。

1. マジックショーでは常套化された感がありますが、舞台の両袖上部にスクリーンがあって、最初から最後まで舞台状況の映像を流しています。そもそも映像を流さなくても観客が楽しめるような構成にすることが基本的な考えで、その上でクローズアップマジックなど見えないあるいは見えにくい演目に限ってスクリーンを導入するべきで、最初からスクリーンありきという考えは安易だし、ましてやカメラを意識してのポーズやおどけたしぐさはもってのほかだと思います。観客にスクリーンを見ることを強要しているようなもので、何のためのステージショーなのか。テレビ中心の仕事が影響しているのかもしれない。
2. ボランティアの選び方やボランティアへの対応がイマイチ。これも撮り直しがきいたり、観客が何でも言うことをきいてくれるテレビとの違いが出たのでしょうか。
3. 照明。いつからかでしょうか、舞台から観客に向けてサーチライト(?)をあてるようになったのは、今回もそうでしたが、会場全体の雰囲気作りのためなのか、でもはっきり言って観る側からすればライトが直接目に当たると眩しくて不快!特に今回の場合、とある演目で数分間私の座っている方向ヘライトが固定されたので眩しくて舞台に目を向けられませんでした。
4. 小道具の取り違いや演技自体のてこずりや失敗、あるいは観客の動きを予見できなかったことによる演出効果の見当はずれ。

苦言ばかりで申し訳ないのですが、セロ自身はとても力量ある魅力あふれるマジシャンなので、今回のケースは彼に問題があった訳ではなさそうです。

横浜元気!スポーツ・レクリエーションフェスティバル2008(10月13日/横浜市栄スポーツセンター)
毎週利用しているスポーツセンター主催で「スポーツ・レクリエーション・フェスティバル」なる催しがありました。生涯を通して誰でも楽しんで活動できるスポーツの数々を体験してもらおうという主旨で、その中のひとつの「大道芸(ジャグリング)」というタイトルが目にとまり、ジャグリングもここまで市民権を得たのかと感心しつつ出向きました。横浜のジャグリングサークルによるショーの後に、演者たち自身が希望者にボール、ディアボロ、皿回しを教えるという構成で、親子連れで会場(体育館)は賑わっていました。

かまくら名人劇場 桂歌丸・一龍斎貞水二人会(10月19日/鎌倉芸術館)
何も言うことありません。嘸の上手さに聴き終わった後、唸るばかりです。紙切りの林家今丸さんの高座の時に「紅葉狩り」とリクエストして取り上げてくれました。良いお土産になった。

映像「ポリショイサーカスの人々」(10月25日/昭和館)
映像の製作年は不明(恐らく昭和30年代)。どこかの体育館なののでしょうか、来日したポリショイサーカス公演の様子が約43分間にわたって記録された映像です。チラシによると、工事の飯場などで作業員の慰労のために上映されたものと思われる、とのこと。従ってサーカス芸そのものを楽しんでもらおうという娯楽用の仕上がりになっています。へえ～昔はこんな演目があったんだあ、と(サーカス好きの人種にとっては)今見ても十分に楽しめます。演目毎にナレーションが入るのですがそれがまた昭和っぽくて、歓声に湧く観客のヘアスタイルとかファッションに懐かしさを覚えて少年期にタイムスリップしてしまった。

ファン・ヤン メガバブルショー(10月25日/新宿コマ劇場)
ファン・ヤンのステージが生で観られるなんて!かれこれ20年ほど前にシャボン玉パフォーマンスに興味を持ち、ネットが無い時代にパソコン通信で海外のデータベースにアクセスしてシャボン玉情報を収集し、海外から書籍や道具、さらにシャボン玉液はドイツや米国のメーカーから直接送ってもらったりして、自分なりに研究していました。その頃テレビでファン・ヤンの映像を見て驚愕!何だこりゃ!?

結局シャボン玉に関しては途中で挫折してしまいましたが、思ったのはファン・ヤンのショーを生で観る機会は一生涯無いだろうなということ。し、しかしそれが現実となったのです!長生きはするもんですねえ。(笑)

1962年ベトナム生まれのユーゴスラビア育ちの彼は、幼い頃は貧しく読書と空想が好きな少年でした。いつか虹を捕まえるんだ、虹を作ってみせるんだという、子供の頃からの追い求めていた虹そのものが、彼の夢でありシャボン玉でもあったのです。そうなんです、このショーそのものが彼の夢を具現化した世界で、観客と夢を共有して、会場内に溢れんばかりのシャボン玉ひとつひとつに皆それぞれが夢を思い描くような、そんな心暖まる素敵なショーでした。